

昨日、着任式と始業式を行った。体育館に入ってみると、生徒同士の間隔を広くとってあるため体育館の後ろのほうまで生徒が並ぶようになっていた。壮観な眺めだった。列がきちんとしていることもあるが、生徒一人一人の式に臨む姿から、学年が一つ上がって新学年をスタートさせる心意気のようなものが感じられた。

始業式の前に、前年度の3月に実施できなかった表彰式を行った。まず皆勤賞の生徒の名前が呼ばれた。すると、最初の生徒の返事がすばらしかった。次の生徒の返事もよい。そして代表生徒の返事は立派なものだった。

昨年一年間、梁川高校に勤めていて何とかしたいと思っていたことがある。それは、表彰などの際の返事である。声が小さく聞こえない生徒が多かった。せっかくの晴れの舞台である。堂々と大きな返事をしてほしい。だが、生徒にはいろいろな事情がある。一律に大きな返事を求めることは躊躇された。

そして昨日が新年度のスタートである。何事も最初が肝心である。もし、表彰生徒の返事が小さかったら、大きな返事をしようと呼びかけるつもりだった。ところが、何人もすばらしい返事をする生徒の姿を見ることができた。話をするまでもなく立派な返事を褒めるだけでよかった。「〇〇君、あなたの返事は立派です」「〇〇さん、あなたの返事はすばらしい」「〇〇君、あなたの返事は最高です」他の生徒にモデルを示すことができた。

本来は、新年度のスタートの日に表彰式はない。このような特別な状況だからできたことである。おかげでいいスタートを切ることができた。初日で、この1年間の流れが決まったような気がする。そして何より新2年生と新3年生全員が登校し、元気な顔を見せてくれたことが一番である。

始業式では、自信と誇りを持ってほしいという話をした。何もしないのでは自信も誇りも持てない。将来のことを真剣に考える。夢を持つのもよい。それに向かって目標を定める。計画を立てる。実行する。その結果、目標が達成される。すると、小さな自信を得ることができる。このようなことを高校生活で何度も繰り返す。そのうちに、小さな自信が大きな自信へと変わっていく。最終的には、このような高校生活を送ってきた自分自身を誇りに思ってもらいたいのである。こうやって持つことができた自信と誇りは、きっとその後の人生を支えるものとなるはずである。

梁川高校の3年間で、確かな自信と誇りを持ってほしい。今日、本校に入学した27名の新入生は、梁川高校の最後の卒業生となる27名である。特別な生徒たちである。2・3年生を入れても、これから梁川高校の卒業証書を手にすることができる生徒は91名しかいない。そう考えると、一人一人が特別な生徒に思えてくるのである。

生徒一人一人に自信をつけさせるために何ができるか。どんなサポートができるか。91名の生徒たちは、梁川高校を卒業するとき、自分の高校生活を誇りに思ってくれるだろうか。誇りに思えるように何ができるだろうか。何をすべきだろうか。この1年間、ずっと考えていきたい。もし、生徒が自信と誇りを持つことができたとしたら、実は先生方も、今まで以上に自分の仕事に自信と誇りを持つことができるのではなかろうか。